

現代社会における自己と関係の形成

合原 弘子

現代日本の発達環境は、自己-関係の存立に大きな変容を与えている。自立力と共生力は actual な共生関係において相互活性的に発達し、これが諸個人が社会規範に生きた意味 (reality) を感じる基盤ともなる。日本の近現代化は、それ以前の共同体が持っていた actual な共生を保証する発達環境を崩し、それに代わる環境を構成しないまま進行した。この結果、共生志向を欠く自立志向 (能力主義、「群化社会」的傾向) と、自立志向を欠く共生志向 (ファシズム的心性) という2極が成立し、自立力-共生力の衰退を表わす現象が増加している。

序

現代の日本社会において、以前には見られなかったような種類の青少年問題が増加していることが指摘されている。例えば、家庭内暴力・対教師暴力・残酷ないじめ・無気力症や摂食障害などの現象は、60年代後半から次第に増加し始め、70年代から深刻化していることが諸報告から明らかである。

本論文は、青少年におけるこれらの諸現象を総合的に分析することを通じて、現代社会における発達環境の特性を明らかにしようとする一つの試みである。この際、自己の問題と関係構成の問題という軸からこの分析を試みたい。それは、諸現象を通底しているのが、自己-関係という、最も基礎的な人間存在のあり方の問題化であると思われるからである。

例えば、残酷化の傾向が著しい「いじめ」は、他者関係構成の問題化を表わしている。また、無気力症や摂食障害等は、自己同一性拡散として説明されている⁽¹⁾。さらに、自己と関係の存立の問題化と関連して、既存の社会的規範も動

揺を見せている。対教師暴力、万引に対する罪意識の低下、等がそれである。

現代化は、自己と関係の存立という、基礎的な人間の存立様式に大きな変容をもたらしつつあるのではないか——これが、本論文における問題意識である。無論、変容がすなわち「悪い」結果をもたらすわけではない。先述してきたような病理的な諸現象は、現代のすべての青少年に見いだされるわけではないし、むしろ諸統計によれば、日常生活に満足を感じる青少年が多数派を占め、さらにその数は増加している。また、青少年層を中心にして、現在の社会的規範の動揺を、変化と自由を生むものとして積極的に肯定する論調もある⁽²⁾。従って、これらの「満足派」「現代化肯定論者」の動向も含めて、現代化がもたらしつつあるものを総合的に分析する必要があるだろう。つまり、「満足」と「肯定」の増加の一方で、現代に特有な「病理的現象」が増加しているメカニズムを解明する必要がある。

本論文は次の構成をとる。まず、子供の発達における「自己」と「関係」の発達過程を明ら

かにする。これは、発達とその「病理」が、発達環境とどの様な関係にあるのかを明らかにすることを目的としている(I)。次に、現代の子供がおかれている環境を明確にし(II)、この環境の歴史的な成立過程を検討する(III)。

以上を通じて、現代化が自己と関係の形成に与えた影響を明らかにする(結)。

注(1)「自己同一性拡散」とは Erikson 1956 の概念。自分は何者で、何になるのかと言うテーマに関する不安・焦燥感と生活の緩慢化の並存、対人的距離の失調(孤立と依存のアンビバレンス)等を特徴とする。

注(2) 典型的には、「制度への統合」を拒否し、「分裂」した「キッズ(子供)」を理想として掲げた「浅田彰現象」を挙げられる。このような心性は現代青年層にかなり多くをみることができる。例えば、次のコメント。「古くからの伝統と言うだけでそれが正しいだなんて冗談にも思わないし、良識なんて物はあるのかさえも疑問、クサくて逃げだしたくなる。」(ヤングトークトーク編、1983)

1 子供の発達における自己-関係の形成

子供は、発達段階の初期においては自と他の区別の無い外界認識をしており、ここから「自己」と「他者との関係」を構成していく。この発達過程を支持する環境の性質について明らかにする。

(1)「自己」の成立

子供は初め、母性的人物⁽¹⁾との自他癒合的な共生関係にあり、発達につれてここから分離個体化し、自他の区別を行なうようになる。この自他の認識は、最初イド原則(快・不快原則)によって支配されており、自分の感情や欲求が

満たされるときには「良い母(自己)」、満たされないときには「悪い母(自己)」という形で認識が分裂しており、次第にこの分裂が統合されて行くと考えられている。(Kernberg,1967、ほか)これは、イド原則を現実検討に従って調整する「自我」が成立してくる過程である。

以下では、自我の成立過程に対する、母性的人物との関係性の影響について検討する。

1) 自他癒合的共生期

乳児は、単に物理的な世話を必要とするだけでなく、母性的人物との情緒的な絆を必要とし、これを欠くときにはその後の発達に大きな障害を残すことが多い。(Spitz & Wolf, 1946, Bowlby,1951) Erikson 1950 はこれを、発達には「基本的信頼」が必要である、と概念化している。ここで、基本的信頼を可能にするような環境について検討しよう。

初期における関係を成立させているのは身体性、つまり、表情や動作を通じた共感性である。Merleau-Ponty 1953 が指摘するように、身体性の関係とは自と他が峻別されておらず、いわば癒合して存在する関係性である。これは、子どもにとって自己と他者の区別が確立していないことを意味するだけでなく、母性的人物の側からみてもこの自他癒合的關係性が存在していることを意味する。つまり、子どもの表情や動作を通じて、その感情が自分のそれとして感じられるような関係性が重要なのである。

池田 1982 は、明らかに器質的な障害としての自閉症を除いた自閉症の事例研究に基づいて、自閉症児の家族に「共通感覚の障害」が見られるとしている。「人の気持ちがよくわからない」ために、子どもの立場に立った、あるいは自然なペースに沿った関係が持てず、一方的に自己の方針を押しつけ、侵入的・干渉的になったり、あるいは徹底的に対象化したり放っておいたり

することになるとしている。このことは、身体性における共感性が重要なことを示している。

発達初期に必要な基本的信頼を可能にする関係性を、自他癒合的共生関係と名付けておく。この関係性については、後に詳しく分析することにする。

2) 分離個体化期

基本的信頼の獲得後、子どもは母性的人物からの分離個体化を始める。この時期の病理を表わすと考えられている「境界例的人格」を検討することで、分離個体化に必要な関係性を明らかにしよう。

境界例的人格とは、自我及びそれによる現実検討能力が形式的・表面的にしか成立せず、外界認識が情緒によって歪められる未熟な領域を多大に残しており、なんらかの契機によってこの領域が表面化するという人格障害である。

Masterson 1972 は、境界例的人格の成立環境を次のように述べる。母性的人格が子どもの分離個体化を容認できず、自分と子どもが共生しているときリビドーを与え、子どもが分離個体化していこうとするときリビドーを取り下げようような関係性の下で、子どもの側に「見捨てられ不安」(自我を発達させれば見捨てられるという不安)が生じ、自我発達が阻害される。Masterson は境界例的人格の持つ「未熟さ」をこのような環境に基くものとしている。

一方、Winnicott, 1965a は、境界例的人格の持つ自我及び現実検討力に注目し、次のようにその成立過程を論じている。good enough mother (ごく普通の「ほぼ良い」母性的人物)は、幼児が未熟ながら持っていると考えられる「自我の欲求」、つまり、現実を自分で把握し、これをコントロールしたいという欲求を認め、幼児があたかも自分で現実をコントロールできるかのような「万能感」を持てるように支持し

てやる。これによって子どもは次第に、自発性に基づいて現実検討力を獲得していく。ところが、適切でない育児においては、子どもがみせる表現が読みとられず、子どもの持つ「自我の欲求」が侵害される。この時、子どもは自己の存在自体に不安を感じ、「自己破滅の不安」に襲われ、これを防衛するために、外界(母性的人物)に対する反応のつぎあわせからなる自己を構成する。この自己は、存在の連続性や自発性に基づかないという意味で、「真の自己」から乖離した「偽りの自己」であり、現実適応的ではあるがその適応は形式的・表面的なものにすぎず、空虚なものである。また、内面においては、未熟な領域が残っている。

Masterson と Winnicott の境界例的人格の成立過程論は、子供の発達には母性的人物から与えられる自己発達(分離個体化)への支持が必要であることを示している。1)において、初期発達には自他癒合的な共感的理解が必要であると先述したが、ある段階からは分離個体化への支持が必要になると考えられる。但し、前者と後者は明確に分けられるものではない。子どもの持つ自我の欲求は、母性的人物によって共感的に理解されて初めてその支持も可能になるはずだからである。つまり、分離個体化期の関係性は、自他癒合性を基盤に持ちつつ、他者と区別される自発性をも支持されるような関係性であるといえよう。

ここで、境界例的人格を生じやすいと考えられる、自他癒合的でありかつ自発性が無化されるような関係性について例を挙げて検討しよう。

* A子(22才、思春期痩せ症)「私が友達と旅行しようとする、お母さんはいつも「お母さん一人おいていたらお母さんはどうしたらいいの」って怒るんです。お母さんは寂しいんですね。それがわかるから私は旅行に行

けないんです。」 A子の母「 A子ったら甘えん坊で困ります。寂しいからって旅行にも行けないんです。」⁽²⁾

ここでは、子の自発性（分離個体化傾向）が無化されており、これが子の「見捨てられ不安」をひきおこし、子が親から分離できなくなる状態を見ることが出来る。さらに、親の側にも「見捨てられ不安」があり、子の分離個体化を支持できない状態であることに注目しよう。この時、自他癒合的な共生関係が形成されているが、分離個体化へと向かう自発性に対して「不安」が引き起こされこれが無化されている。

境界例的人格における表面的・形式的な自我及びそれによる現実検討は、本人にとって「空虚」であり「生きた感じ」を伴っていない」として感じられることが多い。ここで言われる「生きた感じ」とは、（通常なら母性的人物によって支持されるはずの）自発性に基づくものであろう。これは、世界と自己の分裂を感じないような、世界への基本的信頼を核にして成立する、世界を自立的に把握しこれに働きかけようとする自発性である。これを「ノエシ的自発性」とよぶことにする。これは生得的な潜勢力だが、発現するためにはこれを母性的人物が共感的に理解し、支持する必要がある。ノエシ的自発性が自我（現実検討力を持つ、自他が区別された固有性）の成立の核となるが、自我の成立後もノエシ的自発性は自我の基盤として残り続け、認識される現実が生きた感じ（現実感、リアリティ）を与える根拠となる。

ノエシ的自発性を成立させるような母性的人物からの共感的理解とは、自他癒合的な「共感」性と、子どもの持つ分離個体化への自発性への「理解」の二つが統合されたものである。この共感的理解に基づいた関係性を「ノエシ的共生」とよぶ。これに対して、ノエシ的自

発性を無化するような自他癒合的共生を「病理的なノエシ的共生」とよぶ。この状態は、「共感」だけがあって「理解」が無い状態として見る事が出来るが、実は、ノエシ的自発性への「共感」が欠如しているという意味で「共感」も十分ではない状態である。この関係によって成立する自我は、形式的・表面的なものである。

以上、「自己」の成立過程を検討してきた。「自己」とは、ノエシ的自発性を基盤に持つ自我のことをいう。これが成立するためには、母性的人物からの共感的理解に基づいたノエシ的共生関係が必要である。

(2) 「関係」の成立

発達初期においては、子どもは母性的人物を意識化しておらず、またそれとの関係を意図的には構成していない。そして、自我による外界認識の発達とともに、他者への認識も進み、それとの関係構成員も育ってくると考えられる。この過程を明らかにするために、まず自我による外界認識の発達過程について検討しよう。

すでに述べてきたように、人間の現実認識には、現実感の裏付けが必要である。言い替えれば、客観的事実 (factuality) は、自己の内的な現実感 (reality) の裏付けがあって初めて生きた意味を持つ。

一方、さきに述べたように、子供の発達とは、快・不快感情（イド原則）によって歪められる外界認識が、感情に左右されない客観性を獲得する過程としてみる事が出来る。

この両者から次のことがいえよう。つまり、発達とは、自己のリアリティを無化せず保持したまま、しかもこれに歪められた現実認識を脱却して客観的現実認識を獲得する過程、つまり、reality と factuality を統合する過程である。

この過程を考えると参考になるのが、Piaget のいう「脱中心化」過程である。Piaget, 1950 は、認識の発達とは、自己の知覚や行動によって認識が左右されるという「(自己)中心性」を脱却し、シエマを再構成する事によって客観的な認識を達成して行くという「脱中心化」過程であるとした。彼の論は、数量や図形等という *factuality* の認識、すなわち、感情とは無関係に達成される認知的発達についてのものだが、快・不快感情によって左右される現実認識の自己中心性を脱却して行く過程もまた、一つの脱中心化過程としてみることが出来る。この意味での脱中心化を、Piaget のいう脱中心化と区別して存在的脱中心化とよび、Piaget の概念を認知的脱中心化とよぶことにする。両者は相互に独立した過程だが、ともに発達には不可欠のものである。

存在的脱中心化とは、自己の *reality* を保持したままその自己中心性を脱却することで *reality* と *factuality* を統合する過程である。この過程は、発達初期において次のような形をとると考えられる。

Winnicott, 1965b によれば、子供の持つ未熟な欲求が母性的人物から共感的に理解され、実現されることで、子供があたかも望む現実を実現できるかのような「錯覚」が形成され、これがその後の発達の重要な基盤となる。例えば、「お腹がすいた」という子供の欲求を母性的人物が共感的に理解し実現するとき、「泣けばお乳がくる」という錯覚が形成される。Winnicott が述べるように、この錯覚とは、「完全に外的な現実」でも、「完全に内的な現実」でもない、いわば子供が母性的人物の支持の下に作りあげる「現実」である。そして錯覚の形成は、自らの欲求が〈現実〉になる、という希望につながり、自ら現実を構成してゆこうとする能動性の基盤

となる。

もちろん、錯覚は常に成立するものではない。自らの欲求が常に満たされるとは限らないという「現実」を、子供は「痛み」を伴って学ぶことになる。従って、この「痛み」をのりこえて現実認識をしていくに十分なだけの「希望」、すなわち能動性の核が必要なのである。そしてこの「希望」は、錯覚を許すような関係の中で生まれるものであり、子供はこれを足がかりにして、次第に「脱錯覚」を行なってゆき、*factuality* を認識してゆく。

「脱錯覚」過程は、存在的脱中心化の一つである。欲求が実現されなかった時、子供は快・不快感情に基づいて「良い母」と「悪い母」を分裂させて認識する。(前者は自己の欲求をすべて満たす者、後者はすべて満たしてくれぬ者という認識で、その時々に応じて成立する。) この時子供の認識は、他者のあり方に一方的に影響を受けている。また、この認識は自己の感情に左右されるという意味で自己中心的である。しかし、〈現実〉を構成しようとする能動性を子供が持つとき、子供は自ら認識を脱中心化し、かつ他者のあり方に一方的に影響を受けずに〈現実〉を構成しうる。例えば、「母には良い面と悪い面がある」という現実認識の構成がそれである。このような〈現実〉は、関係性を創り出し、維持する性質のものである。この意味での〈現実〉を *actuality* とよぶ。*actuality* が構成されるとき、*factuality* と *reality* は統合されている⁽³⁾。

actuality とは、他者に対する共感的理解によって自己の認識を脱中心化することによって成立すると考えられる。そして、これが成立するとき、自他癒合的な共感性に基づきつつ他者を理解することによって、相互に自発性を活性化し合うような関係性も成立すると考えられる。

但し、相互は常に共感しあえるわけではなく、自他葛藤の可能性が常に存在しているはずである。「相互活性化」とは、この葛藤を無化せずにこれを乗り越え、その都度新しい関係性を築き直してゆくことである。このような関係性を **actual** な共生関係とよぶ。

1) で論じた、自己を成立させる関係性であったノエシ的共生は、母性的人物が創生し、維持するところの **actual** な共生関係である。この関係性の中で、子どもは自己と世界の分裂を感じない基本的信頼と、自らの欲求が常に満たされるわけではないという「痛み」を乗り越えて現実認識をしていくに十分な「希望」を獲得し、この共生関係から分離個体化していく。

一方、病理的なノエシ的共生においては、母性的人物は子供の分離個体化への自発性を共感的に理解できず、自他葛藤を無化してしまう。この時子の側では、ノエシ的自発性に基づいた「真の」自己は孤立しており、この孤立の不安から、ノエシ的自発性に根ざさない「偽りの」自己による形式的な適応が行なわれ、その適応の延長として **factuality** の認識が行なわれるが、これは **reality** と乖離したものである。これを「疑似的脱中心化」とよぶ。これに対し存在脱中心化とは、**reality** を保持しつつそれを **actuality** へと再構成することによって **factuality** と統合する過程である。

factuality		factuality
actuality	統合・「存在脱中心化」	分裂・「疑似的脱中心化」
reality		reality

疑似的脱中心化しか行なわれてこないとき、**factuality** の領域では自他区分を行ない得ても、**reality** の領域では未熟な自己中心性が残り、他者認識がこれによって歪められていると

いう人格（境界例的人格）が成立する。このような人格を持つ者が養育者となる時、子どもへの共感的理解が行なわれにくく、病理的なノエシ的共生が形成されやすいと考えられる。

つまり、単純化すれば、適切な発達環境下の適切な発達の結果、子どもに適切な環境を与え得る養育者となるが、不適切な環境下の不適切な発達の結果、養育者となっても子どもに適切な環境を与えることができない、という循環が存在すると考えられる。

適切な発達環境において、この循環は、自立力と共生力の相互活性化として表現することができる。つまり、自立力とは、ノエシ的自発性に基づいて現実の検討を行い、自他の葛藤を乗り越えてゆく能力をいう。この自立力の基盤となるノエシ的自発性は、母性的人物からの共感的理解に支持されて発現するものである。一方、共生力とは、存在的脱中心化を行なうことで成立・強化される他者に対する共感的理解であり、自他の葛藤を乗り越えられるような **actuality** を形成していく能力をいう。これは自立力ある自己の成立によって可能になるものであり、またこれが他者（子ども）の自立力を成立させてゆく。

一方、不適切な発達環境においては、疑似的な「自立」が生じる。これは、ノエシ的自発性を基盤として持たない「偽りの自己」によるもので、**factuality** を認識できるがその認識は **reality** と乖離したものである。この疑似的な「自立」は、自他の葛藤を乗り越えて行くような **actuality** を生み出さない、つまり共生力を持たないものである。この時、他者（子ども）の分離個体化への自発性が共感的に理解できず、自他葛藤を無化してしまう疑似的な「共生」関係が生まれ、この中で子どもはノエシ的自発性に根ざさない「偽りの自己」による疑似的な

「自立」をとげる。

自立力と共生力の相互活性化は、養育者と子どもの関係についてだけ成立し得るものではなく、様々な他者との間で存在している。つまり、他者からの共感的理解は自己のノエシ的自発性を支持し、自立力を強める。そして、自立力の強化によって、葛藤する他者への共感的理解に基づいた存在的脱中心化すなわち共生力も強まり、これが他者のノエシ的自発性を支持してゆく。このような相互活性化、すなわち actual な共生は、例えば兄弟や友人との間に成立しうるものである。

そして、多くの他者との自他葛藤を存在的脱中心化によってのりこえ、actual な共生を構成していくことによって、十分な共生力が養われ、新たな自他葛藤ののりこえも容易になってゆくと考えられよう。

但し、自他葛藤の解決に常に actuality 構成による乗り越えが必要であるとは限らない。いわゆる公的な関係では、基本的に個人の reality (感情)を問題としない関係が結ばれる。個人の reality とは無関係に個人に対して強制力を持つような規範・法は、actuality 構成によらない葛藤解決の方法である。但し、そもそも社会(関係)にたいして個人が意味(reality)を感じ得ない限り、規範や法は個人を内的に統合する原理としては無意味であるから、規範や法に生きた意味を与えているのは actual な共生関係と、これによって保証される自立力と共生力の相互活性化的な発達であるといえよう。

発達と規範の関係について、Piaget,1930 が子供のゲーム規則への態度についての研究から論じている。彼によれば、当初子どもは親からの命令に服従する形で「拘束・他律の道徳」を内面化しており、仲間同士の遊びの規則についても同様に考える段階がある。そして、発達に

つれて、一般の同意を得られれば規則の修正も可能であるとし、新たな規則を自ら構成し、これを尊重するという「協同・自律の道徳」へ移行する。

ここで、親の命令に服従する形で道徳(価値観)を内面化している状態とは、親の持つ価値観に中心化している状態であろう。これが脱中心化されていく契機が、自発的な、基本的に対等な仲間との関係であると考えられる。この中では、共感性を基礎としつつも自他葛藤が存在し得、これをのりこえる際に、仲間の同意を得ながら新たな規範を生み出してゆく過程で存在的脱中心化が行われてゆく。この過程によって、子どもは親との関係によって成立していた価値観を脱中心化し、個別的条件に合うような規範の自律的形成を可能にすると考えられる。

このように成立する規範は、関係に対する生きた意味(reality)を基盤にした、「生きた」規範であるといえよう。そして、これを成立させるためには、actual な共生関係の中で自立力と共生力が相互活性的に発達することが必要なのである。

以上、子どもの発達において「自己」と「関係」がどのように形成されてゆくかを検討してきた。自立力ある自己は、他者との actual な共生関係の中で成立し、この自立力に基づいて、他者と actual な共生関係を形成する能力(共生力)が成立する。このように、発達とは自立力と共生力が相互活性的に発達する過程であり、これは actual な共生関係を必要としているのである。

注(1) これは生物学的母親である必要はなく、父親や血縁以外の他者でも母性的人物として存在しうる。また、必ずしも一人である必要はない。

注(2) 下坂、1982,P.351

注(3) factuality, reality, actuality という用語は Erikson, 1964 から得ているが、概念の内容は独自に規定している。

II 現代日本における発達環境

序で述べたように、現代日本の青少年層に自己存立の問題化と、関係構成の問題化という現象の増加を見ることができる。これらは actual な共生関係の問題化によるものではないかという問題意識に基づき、具体的な問題現象の分析を行うことで、現代日本の発達環境の特性を明確化しよう。

まず、自己同一性拡散現象群について検討する。家庭内暴力のケース分析によると、多くの場合親は子の世話を過剰にやきがちで、子に対して勉強のみを奨励し、その他のしつけに無関心である。一方子は第一次反抗期を持たない「よい子」であり、また友人が少ない場合が多い。これは親が地域社会から孤立しがちな傾向を持つことを反映している。⁽¹⁾このような環境下では、子が現実にも動的に対処してゆく自立力が育ちにくく、親との関係で内面化された価値観を、様々な他者との関係の中で脱中心化してゆく機会も少ない。ここで子は親の価値観を一元的に内面化した「よい子」となるが、なんらかの契機で挫折した時、自らそれをのりこえて新しい価値観を築く力が不足しており、親に「甘え」を併存させた暴力をふるうと考えられる。無気力症や摂食障害も、基本的に、親から独立して自立的な価値観の構築を行う過程の障害として見ることができるが、その成立環境には家庭内暴力と同様な特徴を見ることができる。⁽²⁾

これらの現象を「自立力の障害」としてまとめる。この現象には、家族外の他者との関係が希薄な家族の中で、「過保護」な親子の共生関

係が成立することが影響している。I(1)2) であげたケースは、この過保護の共生関係の一例であり、親が子の分離個体化を許容できない状態である。さらに、現代の親の多くが一般的に内在化させている能力主義的価値観は、子のためという名目のもとに、子のもつ、勉強以外の諸活動への自発的な欲求を無化しがちなものであることに注目したい。つまり、過保護の共生関係とは、子どもの自発性を無化するような病理的共生関係を意味していよう。

次に、共生力の障害の典型的あらわれと考えられる、いじめの残酷化現象について検討しよう。この背景には、第一に、地域仲間集団が解体し、学校のクラスを中心とした同質的で、また感情的に疎遠になりがちな友人関係が増加する傾向⁽³⁾の中で、存在的脱中心化の機会が減少し、異質な他者への共感的理解に基づいた関係構築力が不足しがちである事態があろう。第二に、能力主義的価値観の浸透によって、「弱者が犠牲になるのは当然」という価値観が子どもに浸透しつつあり、また、そのような直接的な表現をとらない場合でも、仲間との関係よりは勉強して競争に勝つことが優先されるという価値観が一般化されつつあることが諸報告から明らかである。⁽⁴⁾この二つの要因から、能力主義的競争のストレスが「弱者」に対する暴力へ向かい、しかも暴力は残酷化するという事態がおこると考えられる。

以上をまとめると、自立力と共生力に関して問題を生じさせやすい現代日本の発達環境は、能力主義的価値観・家族外の他者との関係性の希薄化・仲間集団の変質という特性にあるといえよう。この三者の連関を明らかにするために、これらの環境がどのように成立したかを歴史的に検討しよう。

注(1) 総理府青少年対策本部、1982、青少年白書

注(2) 笠原 1985、下坂 1982 等

注(3) 1979 年の NHK 放送世論調査によると、「同じ学年の友達だけ」「性質の似ている友達が多い」「自分と同じくらい勉強ができる友達が多い」と答える小 6 生、中 2 生はそれぞれ 60～70% を占める。(NHK 放送世論調査所編、1980『日本の子どもたち—生活と意識』、日本放送出版協会)
また、1982 年の深谷らの調査によると、「友達ととっくみあいのケンカをしたことがほとんどない」と答えた小学生は、男子 30.7% 女子 66.7%。
(兄弟とは男女ともに 14% 弱) (『モノグラフ・小学生ナウ』、1983、vol.2、10、生活体験、福武書店)

注(4) 多数の例があるが、例えば次の例には明確に表われている。いじめられる理由を問われての小学生達の答。「おもしろいじゃないか、弱いやつがオタオタすんの。」「いじめられて泣くしか能のない子、結局ダメ人間なのよ。役立たずが犠牲になるのは当たり前じゃない？」(月刊生活指導編集部編、1981、『集団いじめ』、学事出版、p.13)

III 社会の近現代化と発達環境

近代社会の発達環境の持つ特徴を明らかにするためにこれを伝統的共同体の発達環境と比較してみる時、最も大きな差異は「核家族」と「学校」である。

近代的な核家族とは、Persons と Bales(1955)によれば、母子関係が情緒的安定と基礎的社会化を保証し、父子関係が社会的規範を内在化させるものとして理想型化されている。(本論文の概念を使えば、前者はノエシス的共生の関係であるといえる。)そして、家族において情緒や規範という内面に関する基礎的社会化が行われたのち、学校において認知的な発達が進められる。これが、理想型的にまとめた近代社

会の発達環境である。

これに対して、伝統的共同体においては、まず子どもの内面的社会化を行う場は核家族(母子関係)に限定されていない。子どもがノエシス的共生を結ぶ相手は母親に限定されず、家族をこえた子育てのためのネットワークが存在する。(Mead, M., 1928)[原, 1979]ほか)また、ノエシス的共生を保証する集団が共同労働の集団でもあり、社会的規範は基本的に子どもが労働に参加することを通して内在化されてゆく。認知的な発達も、労働を通しそれに応じて行われており、近代的教育におけるような均質的発達は見られない。(Cole と Scribner, 1974)

以上のような差異は次のような社会の存立原理の差異からもたらされるものであろう。伝統的共同体は社会の存立のために、構成員の自立力と共生力を不可欠のものとしている。そして、子どもが、生活と生産のための自立力と、集団を構成する共生力を持った「一人前」として育てていくような発達環境を保証していた。これに対して近代社会では、家族は他家族と直接的に共働することによって存立するのではなく、市場における物象的關係を通して存立しており、具体的な人格的關係をその存立原理としては必要としていない。この時、子どもは、普遍的に合理的な判断の行える理性的主体として育つべく期待される。

以上は、近代社会における発達環境の特徴を、伝統的共同体との比較を通して理想型的にまとめたものである。以下では、実際の歴史上において、発達環境がどのように成立したのか、その内実を検討しよう。

(1) 能力主義的教育体制の成立とその影響

近代的教育理念には、大別すると2つの潮流

がある。1つは自由主義的教育理念で、これは、17世紀から18世紀頃にかけて、RousseauやLocke等によって主張された。自由主義的価値観に基づき、個人の内面に国家権力が介入することを否定し、基本的に親の私的教育が理想とされ、学校教育も知育に限定されるべきである、とするものである。(但し、Locke等の自由主義的思想家において、この理念は市民階級にのみ適用され、労働者階級に対しては勤勉等を教化しようとする道徳的教育が主張されていたことに注意しておきたい。)一方、1870年代から1890年代にかけて西欧諸国で成立した近代的公教育は、基本的に道徳教育を行い、勤勉な労働者・愛国的な国民を育成することを理念としていた。(このような教育理念を国家主義的教育理念と呼ぶ。)

実際に成立した公教育制度は、諸国によって差異はあるが基本的に国家主義的理念に重点をおいた近代化推進のための制度として機能したもので、その成立は国家によって推進された側面が大きい。但し、国民側の公教育への要求・支持があったことにも注意すべきである。この両者を連結したのが「能力主義」的価値観である。すなわち、試験によって評価が定まるような一元的な知的能力主義によって学校及び社会体制が編成される時、学校制度は国民の側からはそれまでの階級制度を個人が乗り越えるための社会的上昇の手段として期待される。このようにして国民的要求と国家的要求が結びつくことによって、近代的公教育制度が確立していったと考えられる。

この過程の内実を、日本に焦点をあてて概観しよう。

日本の場合、明治以降の近代化において、近代的公教育制度は伝統的共同体における発達環境の解体と共に浸透していった。この時、立身

出世的価値観のもと、能力主義的競争が浸透していったが、これによってひきおこされる「個人主義」的風潮が共同性を解体する傾向が1900年頃よりジャーナリズム等で危惧され始め⁽¹⁾、また「家族=国家観(石田,1954)」的な、個人性を無化する形の共同性が称揚されていった。一方、「個人主義」は共同性と乖離した「欲望自然主義」的な「群化社会」(神島,1961)を形成しがちであった。このような近代化の過程の帰結としてファシズムの心性が登場したと見ることができるが、これは、個人性を全く排除した、擬制的な「共生」の象徴を<天皇>へと吸収させることで共同性を喚起しつつ、一方で「敵」に対しては「欲望自然主義」を噴出させていたものと考えられる。このような心性は、存在的脱中心化に欠け、認知的にも自己中心性が残っている「非論理的」「非合理的」なものであった。これは、自立力と共生力の相互活性的な発達環境が崩れたことにより、一方では自立傾向を全く欠く「共生」志向が、他方では共生傾向を全く欠く「自立」志向が生み出された結果として理解できるものである。このように、日本の近代化は自立力と共生力の均衡を崩す傾向をもつものだった。

さて、敗戦以降、1950年代後半より、政府の教育方針は、財界の要望を受けて基本的に能力主義体制を推進するというものになったが、これを国民側も基本的に支持していった。この結果教育理念は能力主義に一元化されていった。

現代日本の能力主義的教育体制は、国家的要求と国民的要求が連結することで確立したものであるが、この両者は必ずしも一致・調和するものではない。政府は、能力主義的体制の推進を教育方針とする一方で、「期待される人間像」(1966)等において、社会の共同性が解体してゆく傾向に危機感を表明し、道徳教育を強調しよ

うとしている。これは、国家の経済的発展を目標とする見地からは、能力主義と共に「愛国心」等の共同性が必要とされることに基いていよう。しかし、能力主義の持つ、個人主義的傾向はこのような共同性を解体してゆくものである。現代の教育体制は根本にこのようなジレンマを持っているといえよう。

(2) 核家族の孤立化と地域仲間集団の解体

国民が能力主義的価値観を内在化させていった背景には、高度経済成長期以降、産業構造の急激な変換に伴い、地域共同体から切り離された核家族層が都市に大量に流入し、この層が個人主義的な価値観を支持した事態であろう。家族は、共同体における人格的なつながりを失い、消費社会とマスコミに特徴づけられる大衆社会の中で孤立する傾向が強まった。また、家族数が減少した上に、「父親不在」とよばれるように、父親と子供が接触する機会が減少した。

一方、地域仲間集団は高度経済成長期の開始を境に解体され始め、塾通いが急速に一般化し、1985年の中学生対象の調査では「放課後友人と全く遊ばない」と答えたものが76%を占めるといふ事態が成立するまでになった。⁽²⁾

これらの結果、子供にとって他者との交流の機会が減少し、共生力の問題化が顕著になり始めた。さらに、発達環境において核家族、特に母子関係の影響が非常に大きくなり、それ以前には様々な他者との関係の中で修正され得た初期発達における不適切さが、そのまま問題化する状況も多くなった。特に、「過保護」による子どもの自立力の発達の問題化がみられるようになった。

注(1) 有地、1977

注(2) 1985年3月、日本青少年研究所による中学生2300人対象の調査、朝日新聞1985年3月23日

結 現代社会における自己と関係の状況

以上述べてきたように、現代日本にみられる自立力-共生力の衰退は「能力主義に一元化した学校教育体制」と、「地域共同体から孤立した核家族」という背景から発生しているものである。日本においては、伝統的共同体が持っていた自立力-共生力を養うような環境が急激に解体したあと、自立力-共生力を養う新たな環境が再構成されないままに近現代化が進行し、この結果、孤立した核家族が物象的に社会と関係し、学校は能力主義に基づいて編成されるという、近代社会の発達環境のいわば骨格だけが人格的關係性をぬきに成立したと考えられる。⁽¹⁾従って、自立力-共生力の衰退という、人格的關係をその根底から解体させる可能性を持つ現象が増加しているのであろう。

さらに、このような発達環境に対する「適応拒否」あるいは「不適応」現象も増加している。「家庭内暴力」は「家庭」に対する、また、「登校拒否」「校内暴力」は「学校」に対する適応拒否・不適応の現象として見ることができる。

このように現代日本の発達環境は様々な問題状況を生み出している。但し、これらの問題状況は絶対数でいえば「少数」のものである。序で述べたように、現代では日常生活に満足していると答える青少年の方が多数派で、その率も増加している。つまり、人格的關係性の欠乏は必ずしも直接的にネガティブな現象を生み出してはいない。それでは、次に、人格的關係性を欠く傾向の強い発達環境が社会にどのような影響を与えるのかについて総合的に分析するために、「満足」派青少年層と、問題現象群のそれがどのように関連しているのかについて検討し

よう。

現代の「満足」派青少年は、自己の身近な関係にのみ関心を向けがちであり、政治的関心をはじめとした、異質な外界への関心に欠ける傾向があること、さらに自己の満足できる状態を守るという意味での「保守」的傾向が強いことは、各種統計から推測することができる。⁽²⁾

さらに、現代の青少年には、自己の reality を他者とぶつけ合うような情緒的に深い関係がみられなくなってきていることも、彼らの手記等から推測することができる。⁽³⁾

この二つの現象は関連している。つまり、actual な共生関係が解体する傾向の中で、自己の reality は孤立し、他者と共同で作る現実 (actuality) の構築力は弱体化している。この時、外界の諸他者に対する reality に基づいた関心はうすれ、彼らの言葉を借りれば「見知らぬ人は路傍の石」(ヤングトークトーク編, 1983) という状態になる。また、彼らは友人同士でも自己の reality を出し合わない「軽い」関係性を構成しているが、これは異質な他者に対して閉鎖的で、排斥的なものである。つまり、彼らは自己の自由を拘束されることをおそれ葛藤を回避するために「軽い」関係性を構成しているが、この関係性の中で「満足」する時、存在的脱中心化がおこりえず、異質さの衝突からくる葛藤をのりこえるような actuality 構成力、つまり共生力は育たない。従って、「軽い」関係性に入りえぬ異質な者への排斥は残酷なものとなる。(この「残酷さ」は、共感的理解に欠け、存在自体を無化し、いわば「石」と見なすような種類のものである。またそれは、子供における「いじめ」のような直接的な形を取らないが、それと同構造のものである。) このような共生力に欠けた青年層が親や教師となるとき、子どもの reality への共感的理解はなされにく

い。この傾向は次第に表われてきており、例えば、体罰を肯定する教師は 20 代～30 代に特に多い。⁽⁴⁾ また、子どもと一緒に食事をするのが「わずらわしい」という理由で共に食事をせず、しかも子どもの孤独感に気がつかない若い親が増加しているという調査もある。⁽⁵⁾ これらの例は、自分の欲求通りにならないような子どもの自発性を無化し抑圧してしまうという例であり、彼らの存在的脱中心化の不充分さをうかがわせるものである。

一方、「満足」な生活を送っている青少年も、その満足は必ずしも reality に基づくものではない。諸調査によれば、「理由は特にはないが時々死にたくなる」「生きていてもつまらない」と訴える子どもの数は多く⁽⁶⁾、実際、特に理由のないまま、あるいは、些細な理由から自殺する子供が多い。また、「大人になりたくない」と答える子どもが以前と比べ顕著に増加しているという調査もある。⁽⁷⁾ これらの現象は、子どもの生が reality を欠いた空虚なものであることを推測させるものである。

一元的な能力主義的価値観を内在化した親や教師によって、自己の様々な自発的な諸欲求を無化・抑圧され、しかも、友人とも深い情緒的つながりがない — このような reality を孤立化させていくような環境は、必ずしも「不満」を与えるものとは限らない。むしろ、これに適応していく者たちの方が多数である。しかしその適応は、自発性を欠いたものであり、空虚感・生の無意味感を伴うものなのではないだろうか。1985 年に 12 才で自死した少年は、その「未来」という題の詩において、「少年たちの願い／老人たちの群れ／けっきょく、ただのゴミ」と書き残している⁽⁸⁾が、この詩は、能力主義的体制の中で自発性(「願い」)を無化され、能力という物象的存在(「われ」)になってゆく現代の環

境に対する絶望を示していると思われるのである。

しかし、このような絶望を見せず、適応し、「満足」している者の方が多数であることは繰り返し述べてきた通りである。そして、彼らは reality を閉鎖し合い、異質な者を排除する関係性を作りあげている。従って、適応できない、という思いを感じた者の孤立感は深まる。つまり、仲間の「軽い」関係性から排斥された孤立感ばかりか、親や教師も子どもに共感的理解を与えない場合も増加しているのであり、孤立感・絶望感は深まる。

このように、現代の「満足」は同時に深い孤立や絶望とともに存在している。これらの孤立感や絶望感を持つ者たちは、宗教集団や右翼集団へ吸収されていくことが多い。このような集団は自立志向を欠いた「共生」志向を持つ集団であるが、それは「満足」派の「軽い」関係性が、他者との共生志向を欠く「自立」志向を持つものであることと対応するものである。すなわち、現代の青少年においては、共生志向を欠いた「自立」志向（関係における葛藤による拘束を恐れた「自立」志向）と、自立志向を欠いた「共生」志向（孤立を恐れた「共生」志向）という二極が存在するのである。これらは、自立力と共生力の相互活性的な発達、actual な共生が解体した結果である。

日本の近現代化過程は、以上見てきたように、戦前においても戦後においても、自立力と共生力の均衡(actual な共生)を解体させてゆく過程であった。

近代社会は、原理的には人間相互の actual な共生関係をその存立に必要なとしていない。生産力が発展し、商品経済が進展した現代においては、経済的構造が社会を自動的に存立せしめているようにみえる。能力主義的教育理念とは

このような社会観を前提にして成立しているものであり、また、能力主義的教育体制が近代化を推進し、維持している。

しかし、この結果 actual な共生関係が解体し、社会を根底から解体させる傾向が現われつつある。つまり、社会は外的に、制度的に存立しつつも、それを支えていた内的な基盤である所の自立力と共生力が失われ、規範は生きた意味(reality)を失ってゆきつつある。actual な共生関係が解体するとき、社会を構成する一人一人の内的な存立根拠が失われていくのだといえよう。

注(1) 他先進諸国でも「校内暴力」「自己同一性拡散現象」等の増加は認められている。現代化が発達環境に与える影響をより深く分析するには、これらの他国との比較研究が必要だが、これは今後の課題と言える。

注(2) 総理府青少年対策本部、1981『10年前の比較からみた現代の青少年』、NHK放送世論研究所編1980『第2日本人の意識』等。

注(3) たとえば、次のような発言がある。『若者はもっと素直に感情を表わすべきだ』そんな脳天気な方法論を僕は信じない。全部吐いて気持ちいいのはたぶん、自分だけだろう。まわりはいい迷惑だ。」「ストレートに本心を言ってしまったら……対立が生じて緊張した雰囲気になるかもしれない。第一、議論になったらわざわざわしいし」「他人とうまくやっていくには、重たい感情は心の奥底にでもぶちこんでしまわなければならない。」「(ヤングトークトーク編、1983)

注(4) 1985年2月の法務省調査(1975～84の、重大と判断された体罰393件対象)によると、教師の年齢は25～29才が最多で23%、ついで30～34才が19%。また、1985年の岐阜県高教組調査によると、体罰を認める教師は全体の54%だが、特に20代は82%の高率に達する。

注(5) NHK「おはよう広場」取材班編1983、『な
ぜひとりで食べるの』

注(6) 1981年、東京都立教育研究所の調査による
と、死にたいと思ったことのある中3生は27.1
%、その動機は「なんとなくムカツク」「はりあ
いが無い」等の「その他」の項目が最多で35.6%
を占める。また、間庭1982には、「ささいな理由」
での子どもの自殺のケースが多数載っている。

注(7) 「早く大人になりたい」という中2生は、
1969年に41%、1979年には20%(NHK放送世
論研究所編1980)

注(8) 杉本治1985『マー先のバカ』、青春出版社

(記) 本稿は、筆者が東京大学大学院社会学研
究科に提出した修士論文要約をもとに、加筆修
正したものである。

主要参考文献

- 有地 亨、1977、『近代日本の家族観、明治編』弘文堂
- Bowlby, J., 1979, *The Making & Breaking of Affectional Bands*, Tavistock Publications Ltd. 作田勉訳、1981,
『ボウルビー母子関係入門』、星和書房
- Cole, M. & Scribner, S., 1974, *Culture & Thought—A Psychological Introduction*, J. Wiley & Sons, Inc. 若井邦夫
訳、1982、『文化と思考』、サイエンス社
- Erikson, E.H., 1950, *Childhood and Society*, W.W. Norton, 仁科弥生訳、1977、『幼児期と社会』 みすず書房
- Erikson, E.H., 1956, "The Problem of Ego Identity", *Journal of the American Psychoanalytic Assoc.* 4;
56-121, 小此木啓吾訳編、1973、『自我同一性』、第三部、誠信書房
- Erikson, E.H., 1964, *Insight and Responsibility*, W.W. Norton, 鎌幹八郎訳、1971、『洞察と責任』、誠信書房
- 原 ひろ子、1979、『子どもの文化人類学』、晶文社
- 石田 雄、1954、『明治政治思想史研究』、未来社
- 池田 豊 應、1982、「自然さの喪失——人間学的自閉症論から見た現代の教育観」三枝・田畑編、『現代の児童
観と教育』、福村出版
- 神島 二郎、1961、『近代日本の精神構造』、岩波書店
- 笠原 嘉、1984、『アバシーシンドローム——高学歴社会の青年心理』、岩波書店
- Kernberg, O.F., 1967, "The Borderline personality organization", *J. Amer. Psychoanalytic Assoc.*; 15:641-685
- 間庭 充 幸、1982、『犯罪の社会学——戦後犯罪史』世界思想社
- Masterson, J.F., 1972, "Treatment of the borderline adolescent; Phenomena in the psychoanalytic
situation", *Psychoanal. Study Child* 26, 成田・笠原訳、1979、『青年期境界例の治療』、金剛出版
- Merleau-Ponty, M., 1953, *Les relations avec autrui chez l'enfant, Éloge de la Philosophie*, Galimard, 杉浦・
木田訳、1966、『幼児の対人関係』、みすず書房
- Mead, M., 1928, *Coming of Age in Samoa*, 畑中・山本訳、1976、『サモアの思春期』、蒼樹書房
- Parsons, T. & Bales, R.F., 1955, *Family, Socialization and Interaction Process*, Routledge and Kegan Paul,
橋爪他訳、1970、『核家族と子どもの社会化』、黎明書房
- Piaget, J., 1930, 大伴茂訳、1957、『児童の道徳判断の発達』、同文書院

- Piaget, J., 1950, *La Construction du réel chez l'enfant*, Delachaux-Niestle,
- 下坂 幸三、1982、「摂食障害を生み出す家族の病理」、『講座家族精神医学3』、弘文堂
- Spitz & Wolf, 1946, *Anaclitic depression, An inquiry into the genesis of psychiatric condition in early childhood*; *Psychoanalytic Study of the Child* vol.2, International Univ. Press
- Winnicott, D.W., 1965a, *Playing and Reality*, Penguin Books, 橋本雅雄訳、1979、『遊ぶことと現実』、岩崎学術出版社
- Winnicott, D.W., 1965b, *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*, The Hogarth Press Ltd. 牛島定信訳、1977、『情緒発達の精神分析理論』、岩崎学術出版社
- ヤングトークトーク編、1983、やさしい世代からのメッセージ、講談社

(ごうはら ひろこ)